



## 穆時英研究 モダニズム文学の中国における展開

著者	福長 悠
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18378号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00125686">http://hdl.handle.net/10097/00125686</a>

## 【博士論文要約】

### 穆時英研究——モダニズム文学の中国における展開——

#### 序論

1930年代の中国は政治状況が相対的に安定し、特に西欧列強の租界が置かれた上海では、かりそめの繁栄とともに西洋的な消費文化が花開いた。このような状況に登場したのが、現在「中国新感覚派」あるいは「中国モダニズム」と呼ばれる一群の文学者たちである。

本論文は、中国におけるモダニズム文学の展開を探るために、「中国新感覚派」の主要な作家である穆時英の作品を分析する。とくに、穆時英のテキストの背景となる文化的・社会的・政治的背景の探求を通して、穆時英の作品にみられる近代性（モダニティ）の問題を考察することが本論文の目標である。

#### 第1節 穆時英の略歴

穆時英（1912－1940）は1930年に『新文藝』に「咱們的世界」（おれたちの世界）を発表して文壇に登場し、アウトローの俗語を駆使して下層の生活や感情を語る小説によって、左翼文壇の注目を集めた。これらの作品は、『南北極』にまとめられた。

穆時英が処女作を発表した『新文藝』の同人は左翼文芸の紹介に努める一方で、モダニズム文学や日本の新感覚派の翻訳と紹介にも取り組んでいた。『新文藝』同人の傾向は穆時英に影響を与え、穆時英が1931年10月に発表した『被當作消遣品的男子』は、大学のキャンパスを舞台に男女の恋のかけひきを描いた作品である。そののち、穆時英は「上海的狐步舞」（上海のフォックストロット）、「夜總會裏的五個人」（ナイトクラブの五人）など、都市生活者の遊興を描く作品を発表した。

#### 第2節 文学史における「モダニズム」と「新感覚派」

穆時英の文学史的な位置づけをめぐっては、二つの名称が用いられる。一つは「中国モダニズム文学」であり、もう一つは「中国新感覚派」である。

中国新感覚派は、1922年に杭州で結成された「蘭社」にその源をたどることができる。成員は施蛰存、戴望舒、杜衡らであった。1928年に彼らは、日本留学を経て上海に移住した劉呐鷗の出資のもと、『無軌列車』を創刊し、『無軌列車』が発禁処分にあったのちは、『新文藝』を刊行する。穆時英は『新文藝』に投稿することにより、同人に加わる。彼らは自らの文学的傾向を積極的に外部に宣伝することではなく、自身の集団に命名することはなかったが、現在では「中国モダニズム文学」「中国新感覚派」の名称が定着している。

### 第3節 穆時英に関する先行研究

1980年代には、中国で文学史の見直しが進められ、穆時英の作品にも光が当てられた。嚴家炎氏、呉福輝氏らによる再評価では、都市文学としての面に注目が集まり、初期の作風と新感覚派的な作風の断絶が強調された。在米の李欧梵氏（Leo Ou-fan Lee）、史書美氏（Shu-mei Shih）の研究では、モダニティの構築、ポストコロニアル批評の観点から中国新感覚派の小説に対する分析が進められた。

これに対して、日本では李征氏、銭曉波氏が日本と中国の新感覚派について比較文学的研究を進めた。また、鈴木将久氏、高橋俊氏、城山拓也氏らの研究では、テキストの内外を往還する形で、穆時英の「現実」「リアリティ」への関与が議論された。

### 第4節 本論文の目的および方法

本論文では、穆時英が1930年から32年にかけて発表した作品から「南北極」、『被當作消遣品的男子』（暇つぶしにされた男）、「生活在海上的人们」（海に生きる人々）、『空閑少佐』、「斷了條胳膊的人」（片腕を切断された男）の5作品を取り上げ、作品の言語的、修辭的特徴や、人物形象、心理表象の問題を検討する。

「南北極」など初期の作品の俗語表現が、下層民の生活感情と深く結びついているように、文体や言語の問題は、表現の背景にある社会的事象への視座を必然的に呼び起こす。作品の背景を探るためには、穆時英が参照した文学作品や新聞記事など先行テキストを掘り起こし、作品と比較する作業を行う。

このようにして、穆時英が自らを取り巻く同時代的状況をいかに捉え、作品として再構成したかを探る。作品自体の文体的・修辭的な特徴、および先行テキストとの比較を行うことで、そのモダニズム文学としての特色を明らかにし、作品の文化的・社会的・政治的背景と近代性（モダニティ）の問題を探ることが、本論文の目的である。

## 第1章 穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學

### 第1章 第1節 はじめに

文壇に登場した当初の穆時英は、俗語を駆使して下層民の生活や感情を描いた作品で一世を風靡した。そのころの代表作は、「南北極」（『小説月報』第22巻第1号、1932年1月）である。

そののち、穆時英は『新文藝』同人の影響を受けて、日本の新感覚派の影響を受けたとされる『被當作消遣品的男子』（良友図書印刷公司、1931年10月）を発表する。本章では、両作品における恋愛と性愛の問題を探るため、日本の詩人堀口大學（1902－1981）の作品の引用を分析した。引用される堀口の詩句は、都会的で享樂的な男女関係を詠ったものであり、都市と主人公、女性と主人公の関係を伺うことができる。

## 第1章 第2節 「南北極」における性愛

「南北極」は山村出身の青年「小獅子」の一人称で語られる。小獅子は山村で羊飼いをしていたが、失恋を契機に上海へ出奔する。上海で彼ははじめ乞食や人力車夫をして暮らす。のちに貸間の大家「張老頭児」（張じいさん）の紹介で資本家の劉家に職を得たが、そこで見たのはこれまでの貧しい生活からは想像もつかない奢侈であった。

作品の主題の一つは、都市における経済的格差である。一方で、作品には様々な女性が登場する。特に、美貌と財力を兼ね備えたモダン・ガールに対して、小獅子は反感を抱く。

劉家で用心棒を勤めている小獅子は、ある夜旦那の妾と息子の不倫の場面を目撃する。息子は妾を誘惑するために詩を口ずさむが、これは実は堀口大學の詩「月夜」の一節である。

「月夜」は劉呐鷗の手により中国語に翻訳され、「堀口大學詩集」として『新文藝』（第1巻第4号、1929年12月）に掲載された詩の一つである。

この場面で、小獅子は傍観者であり、ブルジョワの軽薄さに反感を示す。しかし、別の場面では、彼自身が旦那の愛人に誘惑され、一夜の関係を結ぶ。モダン・ガールとの関係は、反発と拒否から屈服、そして恐怖へ至る。

「咱們的世界」「黒旋風」など穆時英の初期作品では、モダン都市のヒエラルキーにおいて、下層の男性は性愛の面でも欲求不満に陥る。その構図は「南北極」と連続する。

## 第1章 第3節 『被當作消遣品的男子』における恋愛

『被當作消遣品的男子』では、上海の大学生である主人公の一人称で、「蓉子」という女性との恋愛が語られる。蓉子は流行の装いに身を包むモダン・ガールである。主人公は蓉子の魅惑に耽溺しつつ、蓉子に捨てられる不安を抱きながら交際する。堀口大學は彼女の愛好する文学者の一人である。主人公と蓉子が夜中に逢引きする場面では、恋人との逢瀬を詠う堀口大學の詩「室内」が地の文に引用される。この場面で、主人公は都市のモダンを体現する女性を、作家はモダンな都市文学の文体を、それぞれ手中に収めようとしている。

蓉子の思いは徐々に冷めてゆき、最終的に主人公は飽きられ捨てられてしまう。

## 第1章 第4節 おわりに

モダン・ガールの形象と男性性の危機は、両作品に共通する。男性性の危機と、女性像の一貫性からは、モダン都市における男性性が当時の穆時英にとって重要な問題であり、『南北極』所収の作品に見られる荒々しい俗語もまた、それに相応しい形式として選択されたものであると考えられる。同様に、主人公が地方出身で社会の下層にあるという出自を強調する語りもまた、都会的なモダン・ガールとの対比を強調するための方法であると推測される。

「南北極」でも、最終的に主人公は、モダン・ガールの前に抵抗する手段を失い、魅力の前に屈服する。『被當作消遣品的男子』をはじめとする作品で描かれる都市の魅力への耽溺は、「南北極」にその端緒が表れている。堀口大學の受容は、穆時英における文体と女性観の転換を先導する役割を果たしたといえる。

## 第2章 穆時英「海に生きる人々」の典拠と表象

### 第2章 第1節 はじめに

「生活在海上的人們」（海に生きる人々）は、『南北極』初版（湖風書局、1932年1月）に収録される。本章は、この作品が1930年に浙江省の舟山群島六横島で実際に起きた暴動に題材を得たものであることを明らかにし、穆時英が用いた資料と小説の表象の関係を考察した。

「生活在海上的人們」は海島の島民が暴動を起こす物語である。主人公「おれ」は網元に雇用された漁民であり、海難事故で多くの仲間が亡くなる。島民は指導者の「唐先生」を中心に「東岳宮」で集会を開き、地域の有力者を連行し暴行を加える。翌々日、密告を受けて「呉県長」が島に到着するが、群衆は県長をとり囲み、要求を承諾させる。しかし、県長は部隊を率いて島に戻り、暴動を武力で鎮圧する。

### 第2章 第2節 六横暴動の報道の利用

「生活在海上的人們」は『新聞報』、『申報』、『時報』など当時の新聞報道をもとに書かれたと考えられる。たとえば、地域の有力者が東岳宮に連行され、群衆から暴行を加えられる場面は、記事をもとに、群衆の暴力のディテールを付け加えている。

また、小説では、暴動の知らせを受けた「呉県長」が鎮圧のため島に赴く。当時の報道および、80年代に整理された中共舟山地委党史資料徴集辦公室編『舟山革命斗争史資料』（内部資料、舟山市図書館蔵）にも、同名の県長が登場する。県長が役人特有の口上で言い逃れようとしたが、指導者が即時の解決を要求し、群衆の怒号により県長が要求を飲むという筋書きは、三者に強調する。同時に、小説では「唐先生」が群衆の示威を意図的に引き出すアジェンションを行い、より過激な反逆者の形象を生み出している。

小説で「馮筱珊」という人物が殺害されるくだりは、六横暴動で「俞葦村」なる人物が殺害された報道を、俗語表現に置き換えたかのような観を呈している。俞に同情的である記事の言語は、反発と怒りに満ちた暴徒の一人称に置き換えられている。また、後年整理された『舟山革命斗争史資料』では、俞が漁民を搾取していた実態が明らかになる。俞の人物形象は、小説の最大の敵役「大腦袋蔡金生」（大頭の蔡金生）と重なる。

地域の有力者への暴行、俞葦村殺害、県長を包囲するなどの経緯は、『時報』の報道では呉県長の報告に基づくという。群衆の残虐さを事細かに描き出す報道の筆は、権力者と目線を共有していたことになる。穆時英は権力者の目線を逆手に取り、島民の暴力性と熱狂を詳述し、彼らの感情や行動の背景を仮構することで、活力に満ちた民衆表象を作り出している。

### 第2章 第3節 資料との相違点

小説では、指導者「唐先生」は島の外部から来た、共産党系と思われる人物である。群衆が嗜虐的に有力者を殺す場面を見た唐先生は、「羣衆簡直是盲目的」（群衆なんて盲目もいい

ところだ)と毒づく。島外から来た「唐先生」は、盲目的な群衆と対比される。小説では、指導者の理性と群衆の盲目性は、ある面では対比され、ある面では協働する。理性と非理性は、単純な包摂でも対立でもない複雑な関係を示す。しかし、六横暴動の指導者は島内の農民と私塾の教師であり、民衆との間に意識の差があったことはうかがえない。

また、暴動が発生した経緯は、小説では海難事故を契機とした網元と漁民の対立であるとされる。しかし、集会の場面で、「唐先生」は「土地陳報」への反対を口にする。これは、当時の報道が伝えた六横暴動の原因であった。この変更により、国政に対する反抗は、島の閉鎖的な社会内部の対立に置き換えられ、暴動の主体は農民から漁民に置き換えられ、物語の背景としての海洋、そして「海に生きる人々」の姿が前景化される。

## 第2章 第4節 島民の表象と浙東地域

穆時英の祖籍は舟山群島にほど近い浙江省慈溪県であり、「回郷雜記」および「談甯波人」というエッセイで、穆時英は同地の気風に触れている。強情で人に屈することを潔しとしない性格は、穆時英が「南北極」など初期の作品で描いた、男らしさと義侠心を強調し、権威に反逆する主人公たちの形象と重なる。

## 第2章 第5節 おわりに

本作品における過激と見える表象は、同時代の現実や浙東地域の気風に着想を得たものであり、穆時英が生きた時代相や地域性に根差している。「生活在海上的人們」のテキストは、彼が参照したであろう新聞記事よりも、下層の人々の言語や荒々しい気風に肉薄するものである。本作品は左翼作家楼適夷の「鹽場」から部分的に影響を受けていると考えられるが、左翼作家と異なる方法で、時代相や地域性を表象しようという作家の意図をうかがわせる。

## 第3章 穆時英『空閑少佐』をめぐる虚実

### 第3章 第1節 はじめに

1932年、上海で日本と中国の軍事衝突「第一次上海事変」が勃発した。穆時英の中編小説『空閑少佐』(良友図書印刷公司、1932年3月)は、事変の渦中で起きたある日本軍人の自決に題材を得たものであることが指摘されている。『空閑少佐』の主人公は日本軍の将校であり、中国軍と交戦中に意識を失い捕虜となる。中国側の病院に収容された空閑少佐は、友人の中国軍人「×師長」の助力により、看護婦「黎姑娘」の心のこもった看護を受け、反戦の願いを抱くようになるが、日本軍に帰還したのち、周囲の冷笑に耐え切れず、自らが捕虜になった旧戦場で自決する。

実在の軍人空閑昇(1887-1932)は、日本陸軍の歩兵少佐であり、上海戦で重傷を負い、中国側の捕虜となった。上海の日本軍司令部に送還された後、自らが捕虜になった旧戦場で自決した。

穆時英は『空閑少佐』執筆にあたって、日本語、中国語、英語による各種報道を参照した

ことが指摘されている。本章では、「空閑少佐」の実像と虚像をめぐる関係を明らかにし、表象を方向付けるメディアと権力の問題について明らかにすることをめざす。

### 第3章 第2節 中国軍人「×師長」と甘介瀾

穆時英の『空閑少佐』では、「×師長」なる少佐の旧友の中国軍人が、身は戦場にありながら病床の少佐を気遣い、医師や看護婦を通じて身の世話をする。一方で、空閑事件についての日本側の報道では、捕虜となった空閑少佐には「甘介瀾」なる中国側の青年将校が付き添い、身の世話をしたという。『大阪毎日新聞』に掲載された甘介瀾に関する記事は、上海の英字紙『The North-China Daily News』（字林西報）に翻訳され、さらには上海の雑誌『社會與教育』にも中国語訳のうえ掲載された。それらの記事では、甘介瀾は空閑昇の教え子であったとされる。しかし、この報道は誤報であったと指摘されている。

『空閑少佐』の「×師長」は、甘介瀾をモデルとした人物のようでありながら、そのモデル自体が虚像であった。穆時英が「×師長」を少佐の友人としたのは、中国側に少佐と対等な人物を設定することにより、日本側報道に対抗することを目指したためであると思われる。空閑事件をめぐる報道と作品の表象のあいだには、幾重にも虚構化の操作が仕掛けられている。

### 第3章 第3節 自決の方法と動機をめぐる虚像と実像

小説の空閑少佐は、自らが捕虜になった旧戦場を再び訪れ、そこで「空閑大隊長戦死處」の墓碑銘を目にして、軍部の意図を察し自決を遂げる。空閑少佐は、その名が示す通り軍部に存在を規定される空虚な存在として描かれている。少佐が軍部の圧力で自決したという事実は、当時の報道には見られないが、戦後に入ると関係者の回想により明らかにされる。

穆時英の『空閑少佐』は、事件に対する同時代の言説を取り込みつつ、実体とのずれやねじれを含むものであった。しかし、日本側報道が伝えた空閑昇や甘介瀾の形象がすでに、イデオロギーに相応しいものとして選択された虚像であった。穆時英の形象は、部分的にせよ日本軍のもつ非人道性に迫っていた。

「空閑」という名前、そして墓碑銘は、小説に現れる表象である。実体である少佐の生は、表象により規定される。これは、戦争と犠牲を賛美する表象が、実体を覆い隠し、実体としての個人の人生を支配し規定していった実際の空閑事件報道のありようと同質である。

### 第3章 第4節 「空」の表象と感覚喪失の場面

小説の空閑少佐は、自身が憲兵に銃殺されるさまや、軍刀で割腹するさまを思い浮かべる。この想像では「空閑少佐」という名前がリフレインされる。「空閑」なる文字の反復は、その字義的な意味「空虚」を強調する。上海へ送還される場面で、少佐は自身の空虚を自覚する。「空」の文字は実体を指すための記号であることを越えて、多義性や象徴性をまとい、最終的には名前の持ち主を呑み込んでゆく。

実在の空閑昇は捕虜の身にあつて和歌を詠んでおり、わが身を「けふも空しく暮らしつるかな」と表現している。この和歌は上海の報道にもあらわれる。穆時英は空閑昇が詠んだ「空」の文字から、軍国主義の倫理のもとに生きる日本軍人の空虚さを述べる物語を構想したと考えられる。

### 第3章 第5節 おわりに

本作品で主人公の内面を規定するのは、国家や軍事制度、マス・メディアへの露出、群衆の視線として社会の各層に散在する権力の網の目である。国家や軍隊、マス・メディアという近代的な制度が、個人に自由を許さず内面を束縛する手段としてあらわれている。あるいは、日本固有の倫理である「武士道」と、近代的な制度が相互に絡み合うことにより、少佐は自決を迫られる。

『空閑少佐』で表象は単に実体を表すための手段ではない。両者のあいだには隙間が生じ、その空隙に、表象が複数の対象を指す多義性や遊戯性、そして表象が実体を規定し否定し去るという暴力性が忍び込む。

## 第4章 穆時英「片腕を切断された男」における反復表現と心理表象

### 第4章 第1節 はじめに

穆時英の「斷了條胳膊的人」（片腕を切断された男）（『現代』第1巻第4期、1932年8月）は、都市の工場労働者を主人公とした小説である。本章では、主人公の心理を描写する場面の反復および、事故の場面の反復に着目する。主人公の心理を大量に織り交ぜている点で、本作品はモダニズム的であるといえる。

### 第4章 第2節 「片腕を切断された男」の概要および問題の所在

「斷了條胳膊的人」の主人公は煉瓦工場の労働者である。彼は妻と息子と平和な家庭を築いていたが、ある時から工場の機械に手足を切断されるのではないかという不安を抱くようになり、夢や空想のなかでその場面を反復する。ある日想像は現実になり、彼は機械に片腕を切断される。主人公は失業し、妻は働きに出て帰らず、息子は病死する。

### 第4章 第3節 反復による心的現実の表象

本作品では、夢や空想の形で心的現実が表れ、主人公の不安や憔悴を伝える。主人公が杖をつき子供を抱いて露頭を彷徨う場面は、事故の前に夢や想像として現れ、事故の後にも同様の表現が繰り返される。

それらの表現で、主人公の心的現実とは、知覚動詞「瞧見」（見る）に続く節として表現される。「瞧見」する内容が客観的現実であるか否か、表現から判断することはできない。同様に、主人公が片腕を切断される場面もまた、「瞧見」の従属節である。



主人公の心理は腕を切断される不安を抱き、反復する幻想を生み出す。主人公は事故の前も後も変わらない同質の不安、同質の心理状態を反復し、不安と脅迫観念から抜け出すことができない。作品のプロットの語りは、主人公の心的現実を経由したものであり、客観的現実の後景に退く。本作品において、心的現実のプロットそれ自体である。そこで表現されているのは、主人公の産業社会に対する心理的な不調和や違和感、あるいはそれが生み出す不安と脅迫観念であるだろう。

#### 第4章 第4節 反復される身体の切断

作品の末尾では、主人公の代わりに雇われた労働者が事故に遭う。この場面を見た主人公は、労働者がみな手足を切断され、一家離散の憂き目に遭うという奇怪な空想を見る（「瞧見」）。機械に手足を切断され、家族の紐帯からも切断されるという点で、主人公と他の労働者たちに差異はない。主人公の心的現実が行きつく先は、人が無個性化し、産業社会があたかも永遠に作動を続ける機械のように、人々を呑み込んでいく視像である。

商品である煉瓦も、それを生産する労働者も、等しく無個性なものとして表象されている。産業社会への不調和を体現するかのような主人公の不安な心的現実の修辞もまた、機械的な反復と、その形式上の特徴を等しくする。

#### 第4章 第5節 モダニズムとプロレタリア文学

中国のモダニズム作家と日本のプロレタリア文学の位相を比較するため、ここでは葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」との比較を行う。どちらの作品でも、労働者の身体がその生産する商品との同質性を獲得する。モダニズムとプロレタリア文学という文芸思潮上の差異を越えて、穆時英と葉山嘉樹が近い位相にあったことが伺える。

#### 第4章 第6節 おわりに

「斷了條胳膊的人」で、労働者は近代化と産業社会のなかで個別性を奪われ、馴致されてゆく。穆時英は心理に焦点を当てることにより、産業社会に対する不調和や違和感、疎外から馴致に至る過程を内面から描写し、近代的な機構が人の内面に及ぼす効果を分析したといえる。

### 結論

#### 第1節 都市に対する感情

本論文第1章では、堀口大學の詩の引用を切り口に、穆時英作品の主人公の都市に対する感情の差異と共通点を析出した。「南北極」『被當作消遣品的男子』ともに、都会的なモダン・ガールの形象と男性性の危機は共通する要素である。しかし、『被當作消遣品的男子』以降の作品で、都市と近代に対する感情はモダン・ガールへの嫌悪を媒介とせずに表現される。

## 第2節 先行する文学作品および報道のテキストからの影響

本論文第1章では穆時英の作品にみられる堀口大學の引用について、第2章では楼適夷の影響について検討した。これらの作品で、穆時英は先行する文学作品の字句をほぼ形を変えずに引用している。

しかし、穆時英が参照したテキストは文学作品のそれにとどまらない。第2章では「生活在海上的人們」と六横暴動の報道、第3章では『空閑少佐』と第一次上海事変の報道の類縁性をそれぞれ示した。

これらの作品では、近代的軍隊や組織的な革命運動という近代的な装置が、前近代的な土着の要素と接触することにより、制御できない暴力的な機構へと変化を遂げる。穆時英の筆は文学的虚構と歴史的事実、報道された虚像と表象による真実の暴露の間を行き来し、近代化に揺れる時代相を捉えようとする。

## 第3節 心的現実の表現と人の物象化

穆時英が報道を利用して執筆した作品は、どちらも同時代の社会的混乱を伝えている。これらに加えて、「斷了條胳膊的人」は、労働者が体制に馴致される悲哀を描く。3作品ともに、個人と集団や組織の関係が描かれる。テキストが心理の表白を前面に出す一方で、物語の展開において人の主体性や意志が果たす役割は小さい。主人公を馴致に追い込むのは、工場や軍隊、革命運動といった近代的な機構である。

穆時英が描くモダニティの内実は、近代的な機構が人間を没個性化する場である。穆時英作品で人の「物象化」は、人と機構の関係、人と集団の関係から生じる。心的現実の吐露は実際の行動や選択として実を結ぶことがなく、内的な馴致をもって物語は終わりを告げる。

## 第4節 作風の変遷

創作のごく初期に発表された「咱們的世界」「黑旋風」「南北極」では、文体と題材、題材の点で共通性が見られる。初期の作品に見られた俗語の使用、モダン・ガールに対する性的欲望と男性性の危機、近代都市に対する感情の問題は、以降の作品でそれぞれ形を変えながら深められていったといえる。『被當作消遣品的男子』以降の作品では、文体と題材、主題、方法のあいだに強い相関関係は見いだせない。

## 第5節 文化的・社会的・政治的背景とモダニティ

穆時英は中国におけるモダニティの分裂や破綻を作品に描くことで、時代相に対する分析を試み、独自のモダニズムを試みている。モダニティは成熟を迎えぬまま、前近代的な要素に呑み込まれ、あるいはそれ自体が個人を呑み込む機構として作用する。

モダニティが分裂し変容を余儀なくされた時代の、社会的・政治的な危機を表象するために、文体的あるいは形式的な異化によって、新たな文学を開拓した穆時英の1930-32年の試みは、西洋や日本のモダニズムと相通ずるものであるように思われる。